

イザヤ書 57 : 14～19

使徒言行録 2 : 1～4、36～42

「主が招いてくださる」

【黙祷】

【招詞】 イザヤ書 43 : 1

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 57 : 14～19、使徒言行録 2 : 1～4、36～42

【説教】 「主が招いてくださる」

<信仰>

信仰とは、何でしょうか。一般的には、何か神仏を信じる心のこと、と説明されるかも知れませんが。何か信仰を持っている、と言う時、多くの方は、いくつかある宗教や神々の中から、自分がこれと思うものを選んで、決めて、信じている、と思っているかも知れません。

自分が納得できる教義。自分のためになる教え。自分が求めている救い。これぞ、というものを選んで、決めて、信じる。そこには、自分の決断や、熱心さ、思いの強さなどが、大いに関係しているように思われます。

わたしたちの中でも時に、自分の信仰は弱いだとか、あの人の信仰は強くて立派だとか。信仰を自分の心の思いや、信じる覚悟のことのように言うことがあります。

でも本当は、聖書が語る信仰は、そうではありません。聖書は、信仰の主体は、わたしたちではなく、神さまであると語っています。

それはつまり、わたしたちが信じる神さまを選んだのではなく、神さまの方がわたしたちを救いたいと思って選ばれた、ということです。わたしたちが高みに上って神さまに辿りついたのではなく、神さまの方がわたしたちの許へ下って来られ、ご自身を現された、ということです。わたしたちが救いをつかみ取ったのではなく、神さまがわたしたちに救いを実現し、与えて下さったということです。

すべては、神さまの方から出ています。聖書が語る信仰は、わたしたちの選択や、意志や、決断よりも先に、まず神さまのご意志、神さまの御心があるのです。

そうして神さまが、わたしたちを救いたいと願い、それをイエスさまによって実現し、差し出して下さった救いの恵みを、わたしたちは、ただ感謝して受け取るばかりです。

しかし、だからといって、わたしたちの意志や心がまったく無視されるわけではありません。神さまはご自分がそうして下さったように、わたしたちもまた、神さまに心に向け、神さまのことを思い、神さまを愛し、神さまと共にあることを喜ぶように求めておられるのです。

ですから、信仰を持つということは、神さまの救いへの招きに対して、わたしたちが応答する、ということであり、差し出されている恵みを受け取る、ということであり、生きておられる神さまとの愛と喜びの交わりの中で生きていく、ということです。

つまり信仰とは、神さまと共に生きること、そのものなのです。

この信仰の歩みは、わたしたち一人一人の上に、聖霊なる神さまが働いて下さり、父なる神さまの救いの御心を実現して下さった、神の御子イエスさまの十字架と復活の出来事をわたしたちが知らされ、その恵みを受け取ることによって実現していきます。

今日の使徒言行録に語られているのは、そのようにして、父、子、聖霊なる神さまのお働きによって、救いへ招かれた人々がその招きに応え、救われ、信仰者の群れが生まれてゆく。そのような場面です。

わたしたちは今日のこの場面をもって、ルカによって書かれた御言葉を聞く旅を終えたいと思っています。そして、この御言葉を聞いているわたしたちもまた、同じ神さまによって救いへと招かれ、今日の聖書に記されている、この信仰者の群れに、共に加えられているという恵みを、確かにされたいと思うのです。

<あらゆる国の人々に>

さて、今日読まれた使徒言行録の前半、2：1～4は、十字架で死に、そして復活なされたイエスさまが天に上げられた後、弟子たちに聖霊が降った場面です。

弟子たちに聖霊が降ると、4節にはこのように語られていました。「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。」

聖霊を受けた弟子たちは、他の国々の言葉で、つまり、どこの国の人でも、誰にでも分かる言葉で、話し出しました。

弟子たちが話したのは、彼らがイエスさまによって実現するのを目撃した、「神の偉大な御業」(11節)についてです。その「神の偉大な御業」が、あらゆる国の人々に向かって、世のすべての人々に向かって、語られたというのです。

今日は長いので読みませんでした。2章の14～36節までは、そのことを語るペトロの長い説教が述べられています。

その内容は、旧約聖書の預言者によってユダヤ人たちに告げられていた、神さまの救いのご計画のこと。その預言の通りに、神の御子イエスさまが、まことの人としてお生まれになったこと。このイエスさまが、わたしたちの罪を贖うために、十字架に架かって死んで下さったこと。そして、これも旧約聖書の預言の通り、イエスさまが死者の中から復活なされたこと。そして、天に上げられ、約束の聖霊を弟子たちに注いで下さったことです。

そして、最終的にペトロが宣言したのは、今日読まれた36節の、このことです。

「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなされたのです。」

あの、十字架につけられて死んだイエスという方こそ、神さまが遣わして下さった、メシア、救い主である。このイエス・キリストこそ、あなたたちの主となられる方である。

これこそが、聖霊を受けた者たちを通して、あらゆる国の、すべての人々に宣べ伝えられるべき「良い知らせ」、「救いの知らせ」、つまり「福音」なのです。

<福音と罪>

この、イエスさまの十字架と復活による救いの知らせ、福音は、わたしたちの罪の赦しの宣言であり、新しい命と復活の約束であり、これ以上ない史上最高の「良い知らせ」です。

しかしまた、この良い知らせは、同時にわたしたちに、自分自身の罪に気付かせ、鋭く突き付けるものでもあります。

なぜなら、神の御子イエスさまが、ご自分の命を捨てて、十字架にかけられ殺されることによって、わたしたちの罪を贖って下さった、ということは、つまり、わたしたちが神さまに対して犯した罪は、神の御子であるイエスさまが、呪われた十字架によって苦しんで死ななければならなかったほどに、深刻で重大なものだった、ということだからです。

イエスさまが、わたしたちの代わりに神の裁きを受け、死んで、罪を償って下さった。それはつまり、わたしこそが、裁かれて、あの十字架で苦しんで死ななければならない罪人であった、ということだからです。

救いの知らせは、単なるおめでたい、楽しい知らせではありません。それは、罪の赦しの宣言であると同時に、わたしたちが、神の御子の十字架によってしか救われることの出来ない、悲惨な罪人であることを突き付けるのです。

ペトロの説教を聞いた時、それを知らされたユダヤ人たちもまた、この良い知らせを、驚きと、胸の痛みをもって聞きました。

ペトロは、自分たちが待ち望んでいた、旧約聖書の時代からの救いの預言を、イエスさまこそが十字架の死によって実現して下さい、と教えてくれました。そのことは、十字架で死んだイエスさまが復活し、天に上げられたことで、まことに真実であると知らされました。あのイエスという方こそが、神の救い主、メシアであるとの、確かな証しを聞きました。

それは、先祖代々ずっと待ち続けた、神さまの救いの実現の知らせ、大きな喜びの知らせでした。しかしまた、そのメシアであるイエスさまを、「十字架につけろ」と叫び続けて、苦しみと呪いの死へ追いやったのは、他でもない自分たちだったのです。

ペトロの説教を聞いた後のユダヤ人たちの反応は、37節にこのように語られています。

「人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、『兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか』と言った。」

「人々はこれを聞いて大いに心を打たれ」とあります。心を打たれた、と聞くと、わたしたちは、人々がとても感動したんだな、ペトロの説教に心を動かされたんだな、と思います。しかし、この日本語は、少し優しすぎるようです。

「心を打たれ」と訳されている言葉の、元々のギリシャ語は「刺す」とか「抉る」という意味なのです。これは、不安や後悔の際に感じる、激しい心の痛みを表現する言葉です。

つまり、ここで人々が「大いに心を打たれた」というのは、人々が、心に刃物を差し込まれて、それを回して抉られるような、そんな激しい苦痛を心を感じた、ということなのです。

ここにいるユダヤ人たちは、聖書をよく読み、心から神の救い主が来られるのを待ち望んでいた人々でした。

それなのに、神さまから遣わされたイエスさまを拒み、救い主として受け入れず、十字架につけろと一緒に叫び、あざけり、罵り、十字架につけて殺してしまったのです。最も喜んで救い主を受け入れるべき自分たちが、神さまに対して、とんでもない裏切りと、背きの罪を犯したのだと知らされたのです。

人々は、ペトロが語った言葉によって、イエスさまが救いを実現して下さったメシアであると知らされ、また自分たちの罪を悟られました。そして、心を刺され、抉られて、「わたしたちはどうしたらよいのですか」と使徒たちに聞いたのです。

<悔い改め>

それに対して、ペトロは答えました。38節「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」

ペトロは、人々にまず、悔い改めなさい、神さまの方を見なさい、と言いました。

「悔い改める」という言葉には、方向転換をする、向きを変える、という意味があります。罪とは、神さまに背を向け、あらゆる外れな方向に向かって生きることです。そのように、神さまに逆らってきた罪の生き方をやめ、神さまの方へと方向転換して向き直り、神さまの御許に立ち帰る。それが、「悔い改める」ということです。

しかし、わたしたちは、悔い改めるから、その結果として罪が赦されるのではありません。

わたしたちが悔い改めの思いを起こされるのは、イエスさまの十字架による罪の赦しが、先に、わたしたちに差し出されたからなのです。

神さまが、「あなたを赦す。わたしの方へ向き直り、わたしの許へ帰ってきなさい。」そう言って、赦して下さい、招いて下さり、手を広げて待っていて下さるから。わたしたちは間違った方向を向いていたことに気付かされ、向くべき方向を知らされ、赦しを差し出して下さる神さまの許に向かうことが出来るのです。

わたしたちは福音を知らされてこそ、自分の罪を本当に知ることが出来ます。救いの恵みの中でこそ、罪の赦しの中でこそ、わたしたちは、本当に自分の罪がどのようなものであるかを知り、悔い改めることが出来るのです。

<洗礼>

そしてペトロは、「めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい」と勧めます。洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。

洗礼とは、聖餐と共にある、教会の聖礼典の一つです。イエスさまご自身が、「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け」なさいと、お命じになりました。

洗礼は、「水」を使って行われます。水は、目に見えない神さまの恵みを表すための、目に見える「しるし」として用いられます。

洗礼とは、そのような目に見える水の「しるし」を通して、イエスさまの十字架の死を、自分の罪に対する死として受け取ることです。そうして、イエスさまによる罪の赦しに与ります。また、水に浸されるように、イエスさまご自身の中に浸されて、天におられるイエスさまと一つに結ばれ、イエスさまの復活の命に生きる者になる、ということです。

ですから、洗礼は、ただの象徴的な儀式ではありません。このしるしには、聖霊が働いて下さり、ここで、神さまの救いの出来事が起こるのです。洗礼を受けることは、イエスさまの救いの出来事を、わたしの救いの現実として受け入れる、ということなのです。

ですから、洗礼という儀式そのものによって、救われるものではありません。

そうではなく、イエスさまが十字架と復活によって、自分のために救いの御業を成し遂げて下さった、このわたしに救いを与えて下さった、ということを感じるから、その信仰を告白し、洗礼を受けるのです。

それは救いを、自分の外から来たもの、神さまから来たものとして、受け入れる、ということでもあります。

以前、こういう方に出会ったことがあります。その方はずっと教会に通っているけれど、洗礼は受けなくてもいいと考えている、と話してくれました。こう言われたのです。「わたしはしっかり心の中で神さまはいると信じているし、イエスさまが救って下さったと信じている。だから、わざわざ洗礼を受ける意味が分からない。そういう儀式をしなくても、ちゃんとわたしが信じているんだから、それでいいと思っている」。

しかし、それはやはり信仰を、自分の信じる心のことだと考えているのです。救いの根拠を、神さまにではなく、自分の信じる心に置いているのです。

自分が信じているから大丈夫。しかし、「わたしが心の中で信じている」ということには、一体どれほどの確かさがあるのでしょうか。心の状態が様変わりしたら、信じられなくなってしまいかも知れません。悪魔が誘惑する時、試練の嵐に遭う時、友人に見捨てられる時、心が引き裂かれるような時。それでも、わたしたちは自分の力で、心の中で、神さまの恵みを信じ続けることが出来るのでしょうか。救いをこの手で捕まえ続けていることが出来るのでしょうか。

洗礼は、外的な、外からのしるしです。教会で公に行なわれる、目に見える、確かなしるしです。

イエスさまの救いを信じて、教会で公に信仰を告白し、洗礼を受ける、ということは、救いが、自分の決意や、自分の心の中の出来事なのではない、ということです。救いは、イエスさまが実現して下さった出来事であり、神さまが恵みによって与えて下さるものなのです。

そうやって神さまから与えられた洗礼は、一度与えられたら、もう誰も取り消すことは出来ません。神さまは、永遠に、わたしたちを恵みの内に捕らえて、離しません。

わたしたちは、これからも、弱ることも、つまづくことも、罪を犯すことも、倒れることもあるでしょう。もし信仰が、わたしの心の中のものであったなら、それはいとも簡単に消え去ってしまうに違いありません。

しかし、信仰が神さまによって与えられるものならば、神さまが、わたしたちの信仰を守り、支え、励まし、導いて下さるでしょう。

どのような試練の時も、どんなに弱ってしまった時も、わたしたちは、いつもこの洗礼の恵みに立ち帰ることが出来ます。神さまが、わたしを捕らえ、神さまが、わたしを救って下さり、神さまが、わたしに恵みを与えて下さったのです。そして、わたしは確かに神さまの恵みを受け取った。神さまがわたしのすべてを担い、すべての責任を取って下さいます。

洗礼は、この方の御手の中に飛び込むこと、自分のすべてをこの方の御手に渡すということとも言えるでしょう。しかしそれは、自分で自分を握りしめているよりも、ずっと確かで、平安で、間違いないことなのです。

わたしが洗礼を受け、神さまのものであるということ。神さまのご支配以外、ほかの何者にも支配されないということ。このことが、わたしたちの人生の本当の拠り所となります。

<聖霊を受ける>

そしてペトロは、悔い改め、イエス・キリストの名による洗礼を受け、罪を赦していただくことを勧めた後、「そうすれば、賜物として聖霊を受けます」と述べました。

天に上げられたイエスさまが、聖霊を御父から受けて、一人一人に注いで下さいます。

そのようにして、死から甦られ、天に上げられたイエスさまと、わたしたちは、聖霊によって一つに結ばれます。そうして聖霊によって、天におられ生きておられるイエスさまは、いつでも、どこでも、わたしたちと共にいて下さるのです。

洗礼は、信仰の歩みのスタートに過ぎません。まさにそこから、イエスさまと一体となって、聖霊に導かれて、生ける神さまと共に歩む、まことの人生が始まっていくのです。

<主が招いてくださる>

そしてペトロは「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いて下さる者ならだれにでも、与えられているものなのです」と語りました。

ペトロが聖書の中で語っている相手は、エルサレムに集まっていたユダヤ人たち、旧約聖書に書かれている、神に選ばれたイスラエルの民でした。

しかし、今や、この洗礼の恵みと聖霊の約束は、「神である主が招いてくださる者ならだれにでも与えられる」というのです。神さまが選び、ご自分の許に招かれるすべての人に、イエスさまの救いの恵みは開かれているのです。

そしてわたしたちも、この神である主に、招かれたのです。エルサレムから遠く離れた日本で、異教の世界におり、イエスさまの時代から 2000 年も経った今、まさにわたしたちはここに書かれている、「遠くに在るすべての人」の一人に他なりません。

しかし、主なる神さまは、そのわたしたちにも、「悔い改めなさい。めいめいイエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば賜物として聖霊を受けます」と、わたしたちを選び、恵みへと招いてくださっているのです。

さて、ペトロの説教を聞いて「どうしたらよいのですか」と問うた人々は、まさに御言葉を通して、神さまの救いへの招きを聞いた人々でした。彼らはどうしたのでしょうか。

41～42 節にはこうあります。「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」

人々は、神さまの招きに応え、洗礼を受け、聖霊の賜物をいただき、天におられるお一人の主イエス・キリストに結ばれたのです。そして人々は、互いにお一人のイエスさまに結ばれた、一つの共同体となったのです。

洗礼を受けるということは、イエスさまに結ばれた共同体に、加えられていくということであり、キリストの体なる教会の一員になる、ということです。

この共同体、つまり教会は、「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」とあります。つまり、共に神さまの御言葉を聞き、互いに愛し合い、聖餐に与り、祈りをささげていた。共に神さまをほめたたえ、礼拝していたのです。これは、今のわたしたちの教会の礼拝に受け継がれているものです。

そして教会は、天におられるイエスさまが、再び来られる時まで、終わりの日まで、聖霊によって信仰を守られ、支えられ、導かれながら、イエスさまの救いの恵みを証し、福音を宣べ伝え、神さまをほめたたえる礼拝をささげ続けていくのです。

わたしたちもまた、「神である主が招いて」下されたから、ここにいます。わたしたちは皆、神さまご自身に選ばれて、イエスさまの救いの恵みを与えられて、聖霊を注がれて、この教会へ、この礼拝へ、神さまの救いの恵みへと招かれたのです。

わたしたちもまた、心からの悔い改めをもって、神さまの恵みと祝福にお応えし、大喜びで、神さまをほめたたえる群れでありましょう。

そして、わたしたちの歩みが、聖霊に導かれて、イエスさまの恵みをあらゆる人々に証しするものでありますように。そして、一人でも多くの者が、神さまのお招きに応え、洗礼を受け、教会の群れに加えられていきますように。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちを、あなたの救いの許へ、恵みの許へ、招いて下さったことを感謝いたします。

洗礼に与ったものは、聖霊の賜物を受け、イエスさまによって救われた恵みをますます確かにされ、ただあなたの救いの御手に信頼して、与えられた信仰に固く立って行くことが出来ますように。

まだ洗礼を受けていない者は、どうかあなたの招きにお応えし、イエスさまが差し出して下さった十字架の死と復活の命を、罪の赦しと神の子として生きる命を、感謝して受け取ることが出来ますように。どうか、聖霊の導きをお与え下さい。

イエスさまが、使徒たちにお命じになった、「罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々の宣べ伝えられる」との御言葉が、実現しますように。

感謝して、救い主なるイエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

【讃美歌】 3 4 1 「神の霊よ、今くんだり」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 2 8 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン